

99 誌上発表 饗庭東庵『首書十四経』の鼈頭について

山崎 陽子

日本鍼灸研究会

わが国近世初期の鍼灸に経絡の概念をもたらしたのは、滑寿の『十四経発揮』であり、高武『鍼灸聚英』、馬蒔『靈枢註證發微』、そして張介賓の『類経図翼』である。特に『十四経発揮』は、江戸期を通じて経絡経穴学の標準テキストであった。日本近世の経穴学は『十四経発揮』をめぐって終始したといっても過言ではない。わが国医家による『十四経発揮』の研究は、1659（万治2）年に刊行された谷村玄仙の『十四経絡発揮鈔』10巻に至って頂点に達するが、同じ万治年間（1658–1660）に重要な経絡経穴学書として饗庭東庵の『経脈発揮』7巻が出ている。『経脈発揮』は、のち堀元厚『陰輪通攷』を経て江戸後期に隆盛する考證学的経絡経穴研究の先駆的著作となった。ただ東庵はこれと並行して『十四経発揮』の解説書も著している。万治3（1660）年刊行の『首書十四経』2巻がそれである。以下では、この『首書十四経』と古活字版『経脈発揮』の関係、『十四経絡発揮鈔』との比較などを論じ、日本近世経絡経穴学研究の一助とする。『首書十四経』には日本大学医学部図書館所蔵本を、『経脈発揮』は京都大学医学図書館富士川文庫本を使用した。

『首書十四経』は、『十四経発揮』の重刊本の鼈頭並びに行間に簡単な注記を施したものである。書中に注解者名は見られないが、様々な傍証から饗庭東庵の附注本と判断される。このうち鼈頭の注記は若干体例に乱れが見られるものの、内容別に区分すれば、条文は概ね189条、このうち4つの序文に附されたものが49条、凡例以下の経文に附されたものが140条である。注解は校勘、字句の訓詁、音韻、関連条文の指摘、異説の提示などを主なる内容とする。ただし音積は7条、校勘は10条に過ぎない。訓詁音韻の条文に見える工具書は、『説文』『爾雅』『方言』『広韻』『集韻』『韻会』『増韻』『字彙』『助語辞』、十三経とその注（多くは朱子注）、『老子』『莊子』、史書として『史記』扁鵲伝及び『漢書』『後漢書』『大明一統志』『皇明名臣言行録』『獻徵録』『宋学士文集』などである（注解を含む。以下同じ）。また校勘や俞穴部位の別説の提示、俞穴の主治の追加などのために引用されている医書は、『素問』『靈枢』『難経』『甲乙経』『中蔵経』『千金』『千金翼方』『明堂灸経』『銅人鍼灸』『鍼灸資生経』『難経本義』『難経俗解』『医学綱目』『医経小学』『正伝或問』『鍼灸聚英』『医学入門』『註證發微』『類経』『類経図翼』である。また『十四経発揮』の中国刊本を指すとみられる「唐本」という表記が見える。これらの徴引医書のうち、最も比重の大きいものは『類経』と『類経図翼』である。大雑把にいえば、本書の鼈頭で行われていることは、『十四経発揮』に対して、一方では『素問』『靈枢』『甲乙経』とその古注を引いて注解、補足、訂正し、他方では当時最新の医書である『類経』『類経図翼』を以て解説することに尽きる。なお、『首書十四経』と『経脈発揮』と比較すると、『首書十四経』の鼈頭にある注記と同内容のものは、『経脈発揮』にも若干見られるものの、その多くは経絡流注や俞穴部位の別説を『素問』『甲乙経』とその古注から引いたものであり、『類経』『類経図翼』を引く例はほとんど見られない。この点に、『十四経発揮』の解説書とは性格を異にする、『経脈発揮』の編集意図を垣間見ることができる。また『首書十四経』と谷村玄仙の『十四経絡発揮鈔』を比較してみると、『首書十四経』の鼈頭と全く同じ、あるいは部分的に同じ注解は5割弱であるが、特に序文に付された注記には同文も少なくないことから、両書が何らかの関連をもっていることが推定される。ちなみに『首書十四経』の鼈頭は甚だ簡略で誤刻も散見するが、『十四経絡発揮鈔』を参照することにより判読訂正可能となる。これらのことにも、両書の著作意図の近似性が感じられる。